

景観と領域性

クロード・ラフェスタン
(遠城明雄 訳)

Claude RAFFESTIN
Paysage et territorialité.
Cahiers de Géographie du Québec, 21, 1977, 123-134.

現出(Présentation)から表象(Répresentation)へ

人間がその中にかつその前に置かれている現実(réels)の諸システムが、集合体と場所の間に結ばれる複雑な諸関係を示していると言うことは当たり前になっている。だがこのことはさほど当たり前わけではない。なぜなら《その中にある(dans)》、すなわちシステムの現出から、《その前にある(devant)》、すなわちシステムの表象へどのように移行するのが問題であり、これは正確にまた明瞭にはまだ明らかにされていないからである。エルンスト・カッシーラは次の問題を提起して我々に示唆を与えている。《未開人は川の流れを完全に認識しているが、この認識(acquaintance)は、我々が抽象的かつ理論的な意味で認識(knowledge)と呼びうるものとは非常に異なっている。前者の場合に認識は提示にすぎないのに対して、その理論的意味において認識は表象を含意し前提としている》¹⁾。しかしながらこの現象は未開人へのみかわるものではなく、その状況に応じて我々も同じ条件に置かれていることは十分に明らかである。我々はそれぞれのものの表象を持つことなしに現出を持つことが可能である。なぜなら、直示的な認識から理論的で抽象的な認識への移行を可能にする一般的概念化や概念体系が、我々に欠如しているからである。この理論的で抽象的な認識とはどのようなものであるか。この認識は《世界の現実へと密着する(adhéison)のではなくて、この語の語源的な意味でこの現実の探究であり、理解を可能にする努力である》²⁾。この認識は《媒介の場として、すなわち世界を理解可能にする諸形態がその上に現われるスクリーンとして、理解される限りで言語活動(langage)である》³⁾。

理解可能な諸形態のこの《素描(dessin)》は、地理学との関係では、現実のシステムあるいは地理的構造(géostrucure)の言語あるいはメタ言語を通じた表象である地理文法(géogramme)と呼ばれうるものである。地理的構造は理解されるべき組織(例えば街区、都市、地域)であり、地理文法は言語の介在によって《理解可能にされた》組織である。この過程は以下のように形式化できる。すなわち、仮にG, 地理的構造、G', 地理文法、 α , ある言語とすると、 $\alpha G \rightarrow G'$ である。 α はひとつの変換、つまり言語的空間あるいは数学的空間にGを投射することを可能にすると考えられる⁴⁾。よって地理文法G'はその形態において選択された言語に依存している。ここで利用された言語の性質が介在している。自然言語が問題となる場合に、利用される概念が完全に定義されており、また分析の手続きが同じであっても、同一の地理的構造から投射された地理文法は同一ではなく類似になるだろう。論理-数学的言語が問題となる場合に、同一の地理文法を予想することができる。それぞれの言語は論理的一貫性について同一の係数をもたないということになる。したがって形態-機能的な言語の伝統的概念をもった古典的地理学者によって研究されたモンリオールは、類似の地理文法を作り出すであろう。これに対して計量地理学者によって研究された同じ地理的構造は、同一の題材から出発して同一の分析方法を利用して、同一の地理文法を作り出すであろう。自然言語から論理-数学的言語への移行によって論理的一貫性の係数が高まる。しかしながら、この両者の場合に表象の機構は同じである。我々は、地理的表象、すなわち地理的構造の地理的文法への移行が、単に言語の問題であると言いた

くないし、また言ってこなかった。言語は《媒介の場》にすぎない。この《媒介の場》は社会構造から独立しておらず、その社会組織の中で、そのために、それを通して確立される。それは図式的に表象されるひとつの三角形(図 1)のなかに含まれる社会的な問題設定によって条件づけられている。しかしながら、社会組織

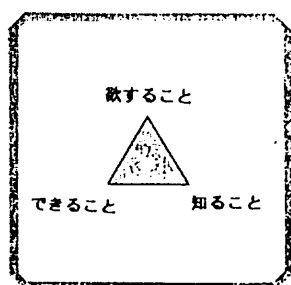


図 1

の支配的な諸目的に応じて、問題は異なるだろう。何を欲し、何を知り、何ができるのか。《能力 (compétence)》や利用されるコードは、これらの問題に与えられる回答に応じて様々であり、その結果Gに投射される言語 α, β, \dots は明らかに異なるだろう。したがって、地理的構造の唯一の表象であるようなひとつの地理学は存在せず、社会に根を張っている所与の三角形から行なわれる選択によって条件づけられる複数の地理学が存在する。全ての社会はひとつの地理的構造の表象を所有し、そのなかで発展するが、しだいにその深層の目的を顕現するひとつの表象を作り上げる傾向がある。非常に単純化すると、現在まで地理的諸表象を構成してきた二つの三角形を区別できる(図 2, I-II)。各三角形は地理的構造を地理的文法へと移行することを可能にする《媒介の場》を必要とする。前者は地理的構造の形態-機能性を表象可能にする記号に特権を与える古典地理学の三角形であるのに対して、後者は、価格、距離、費用のような一義的な諸概念に対応する記号を利用して、その構成を説明し、その再生産を試みる新しい地理学の三角形である。よって前者の場合にスペクタクルの復元がある一方で、後者の場合にスペクタクルを支配するために《測定 (métrique)》によって、スペクタクルを再び作成するという意志がある。二つの三角形は、第一が形態と機能を外示する(dénote)のに対して、第二がその動的な視点から第一を共示する(connote)という意味で記

号論的關係にある。《表現の水準が別の記号論によって構築される記号論は共示的である》⁹⁾。ただ新しい地理学は問題設定の再編成をせずに最初の三角形に数学的言語を適用することがしばしばあるので、つねに上述の關係にあるわけではない。

現在、新しい三角形が構想されつつあると言えるだろう(図 2-III)。大部分、その言語は作られねばならない。第一の三角形が景観の言語を生み出したのに対して、第三のそれは領域性(territorialité)の言語を生み出すだろう。IとIIIは記号論的關係にあり、IIIがIを共示することは明らかである。我々は最後にこの問題に戻ることになるだろう。

我々の企図は、一方で景観の地理学の言語がどのようにして、なぜ構成されたのか、他方でその限界は何であるのかを示すことにある。さらに三角形IIIに基づく領域性の可能な地理学に依拠することで、景観の表象を克服する仕方を明らかにしたい。《克服 (dépasser)》について語る場合、それは景観を領域性で置き換えることを意味するのでは全くなくて、領域性によって景観を共示する手段を発見することを意味する。景観が《見られること(vu)》を表象するのに対して、領域性は《生きられること(vécu)》を表象しようとする。景観の言語が諸形態と諸機能の言語であるのに対して、領域性の言語は諸關係の言語である。したがって諸關係は、異なった問題設定を必要とする。

《見られること》あるいは景観の地理学

直ちに景観の觀念の《歴史的》特徴を主張しなければならぬ。ものは 16 世紀になってまさに西洋のまなざしに關係する。視覚は 17 世紀にその姿を現す。景観を基礎づけるのは古典時代の表象の欲求である。景観はいわば表象することの意志によって確立される¹⁰⁾。したがってまなざしが全てのもをその民に捕えるのだが、その理由はまなざしが全てを知り、把握できると考えるからである。全体的な理解というこの幻想から、スペクタクルを説明する景観が生まれた。それゆえ景観の記述は 17~19 世紀の文学のなかに多くみられる：狭義の文学や旅行者による前地理学的(pre-géographique)の文学に関するかぎりである。前地理学的というのは、ただひとつのコード、ひとつの特殊

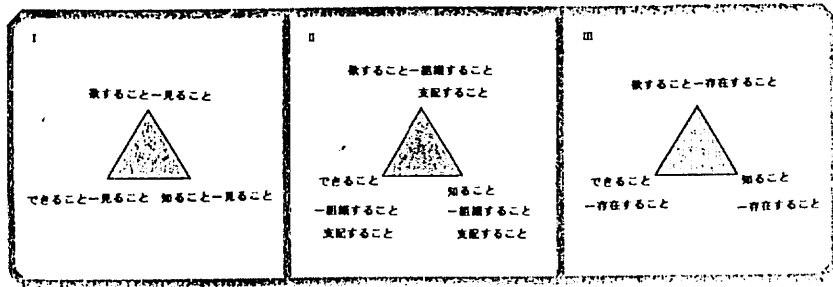


図 2

な言語がまだ存在していないからであり、この言語の不在は地名の目印なしには全ての位置を同定することを禁じているのである。このことを納得するためには、17世紀にジャン・シャルダンがペルシャについて割いているページを再読すれば十分であろう⁷⁾。見ることの知(Le savoir- voir)は、記述者が生まれた国の日常言語の知である。そこから曖昧な記述が生じるが、それはあまり重要ではない。なぜなら、その時まで認識されていないスペクタクルな全体性を演出し、外部性(extériorité)と他者性(alterité)についてのメッセージを、自分自身に中心を置いた《見られること》から伝達することが問題だからである。

すなわち、見ることの知の形成に伴って、景観は過去よりもますます記述され分析されるようになる。この伝統が特にそして同時に排他的に可視的なものに結びつくことに変りはない。《地理学が、その内的な動態とその相互関係を明らかにすることで、諸事実を位置づけ、地表空間の諸分化を理解し、その全体(ensembles)を比較することにあるかぎり、この分化の物質的な表出すなわち景観にかかわることが、まさにこの科学の核心になる》⁸⁾。暗黙のうちにはあるが、そこでは形態-機能的な問題設定がそのすべてになる。最初に諸形態：《アレ山地の景観は、確かに地形の諸形態からなる環境(décor)であるが、それはまた光のある性質でもあり、また多くの風、霧、露雨などからなる気候でもある》⁹⁾。視覚的な語彙の使用は偶然ではない。なぜならその語彙は、構成つまり演出を望む景観の地理学の根本的にスペクタクルな性質を示しうる唯一のものであるから。次に諸機能：《景観は、人間と同様に(aussi)、その自然の植生被覆の時々破壊、イエン(Yenn)の古い集落、その道と小径、第四紀の砕け

た石英のなかに開かれた石切場、トレギュ一台地の耕地、悲しいかな(helas)、テレビの中継塔も組み込む。》¹⁰⁾。《同様に(aussi)と《悲しいかな(hélas)》は、組み込まれようとしているこの人間の場所を奇妙に制限しているけれども、そのことは、景観の地理学が《生きられること》よりもむしろ《見られること》を優先するための環境をしつらえるという考え方を特に補強する。この伝統的な形式において、景観の地理学は両大戦間期にその頂点に達し、引き継がれてきた。つまり《…地理学は、自然と歴史によって豊饒化された永遠のフランス、社会的には全く中性で役に立たない寄せ集めの知識である各々の耕地、家、瓦やスレートの種別性において変わることのないフランス、という非常に穏健な農村主義の価値を賞賛する。マルサス主義のブルジョワジーは、本当に長い間、この鏡をその知的産物に与えてきた》¹¹⁾。この批判が興味深いのは、その故意に論争的な調子にあるのではなく、それが自己充足的な社会の諸目的あるいは少なくともひとつの目的、つまり秩序の愛好を、示唆しているという事実にある。秩序は景観の概念においてひとつの目的である。景観の地理学はたとえ秩序が存在しなくても、秩序を構築し秩序を保証するのである。景観の秩序は見せかけにすぎない。その秩序はしばしばフィクションにすぎない。なぜなら描かれた諸形態と諸機能は、地主の命令によって開拓者が受ける不平等やプロレタリア街区の労働者が耐える不平等によって引き起こされる無秩序を隠蔽するからである。どこに秩序があるのか。《生きられること》ではなく《見られること》のなかに。では景観の地理学は世紀初頭にいかにして認められるようになったのであろうか。ナルシズム的な社会が自らをみつめるために、そして自分自身に付与

したいイメージを永続させるために、この鏡を必要としたことから、景観の地理学は必要になった。十全に配備された舞台の背後に満ちあふれていた無秩序が露呈しないように巧みに用心する非常にイデオロギー的で幻影的な見方である。その極限において景観の地理学は、ポチヨムキン(Potemkine)の地理学にあった。つまり《想像的なものは、《見ること》のかたわらにある》¹³⁾。景観の地理学は、最も評価された社会的価値を高めるのに役立ち、システムが生産したものの価値を信じさせるようにすることにその機能がある保守的なイデオロギーをしばしば意味してきた。

こうした状況において、景観の地理学は、《景観》がもはや人間の伝統と物理的空間の媒介の場ではもはやなく、ひとつの抽象的構造によるある領域(aire)への投射(investissement)にすぎないという意味で、シュミラクールではなかっただろうか？。計量地理学がその多くの研究において意識せずに、このことを証明したことは明らかであるが、この証明はかなり遡る。それは都市周辺の農村景観が価格によってモデル化されることを示したフォン・チューネンとともに始まる。資本制によって発明された、指示対象(référentiel)をもたない基本的な構造的作用のひとつでなければ、価格とはいったい何であろうか。クリスタラーとレッシュに続くベリー(そして多くの著者)の意図しない最も偉大な貢献は、空間における価格公理の作用として構造的な作用の力を示したことである。構造的な作用は置換、交換、連合、分配、いわば相互交換の可能性を導入する。この作用は初歩的な数学の規則に依拠している。循環が閉じられると、景観はもはや構造的作用のシュミレーションにはかならない。ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュが地理学のひとつの方向を書く以前に、フォン・チューネンはそれを価値のないものにしてきた。それゆえに新しい地理学は、居住の場、存在の場としての空間の消滅とその外延を同じくするだろう。景観は権力によって命令される構造的作用のアリバイであった。権力の多重的な形態のひとつが意識的に描かれてきた。こうした状況で景観はもはや幻影(fantasme)にすぎない。地理学が戦争に役立つならば、それは同時に我々の日常的な存在に各審級で介入する権力を隠蔽することにも役立ち、それはおそらく一層狡猾であるのでより深刻である。景観の地理学が、《見られること》の背後に《生きられること》を隠蔽するとした

ら、ある種の新しい地理学はその構造的作用によって《生きられること》を一掃してしまう。つまりこの新しい地理学は、費用の全体によって人間の立地を表示することで、時には生活の価格を発明した。

ともかく地理的構造のひとつの可能な表象である景観の地理学に戻って、メカニズムを示そうと試みねばならない投射のあるタイプについて語る必要がある。景観は、二重の機能を満たしているコミュニケーションの体系である。つまりこの体系は実践的な諸目的に対応し、情報の保存と伝達に役立つ経験を自らに関係づける¹⁴⁾。地理学者がある地理文法のなかでおこなう投射は、分節化によってコード化されたひとつのメッセージである。地理的構造の前に位置した観察者にとって、景観は連辞(シンタグラム)、すなわち地形(平野—丘陵—山地)、気候(暑い—冷たい、湿った—乾いた)などの様々な要素の配列や結合として表われる。同一の場が集落(散居—集居)、土地利用(農耕—牧畜)などの人間的事実に繰り返される。この点に関して、地理的構造を前にして、最初に異なった連辞が標定され、次に範列的(パラダイム)な諸要素の発見が試みられるという意味で、地理学的手法が言語学的であったことが注意されよう。連辞的な平面が通常、地域地理学と呼ばれていることに対応するのに対して、範列的な平面は一般地理学に対応する。事実ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュの示唆では、地域地理学は一般地理学の以前に確立される。未知の体系の前に置かれた時の全く一貫した手続き。

したがって地理学的コミュニケーションはどのように機能するのか、つまり発信者(地理学者)は受信者(別の地理学者あるいはX)にそのメッセージをいかにして伝達するのか？。体系のなかの諸単位を選択し、それを結び合わせる。一連の単位を取り上げよう。

X	Y	Z	...
X'	Y'	Z'	...
X''	Y''	Z''	...
.	.	.	
.	.	.	
.	.	.	

純粋に理論的で初歩的な仕方、景観は諸単位の結合

であるということができる。なぜなら地理学的シンタックスを構成する結合の規則を理解しなければならないからである。x y z' '…が景観P 1を作り出すように、x' y z…は景観P 2を作り出すであろう。シンタックスによって、この形式的な結合のいくつかは可能ではないだろうが、このことは基本原理の修正を要しないと考えられる。この地理学的シンタックスの問題は、計量的方法論の水準は別にして理論的分析の対象を構成してこなかった。言い換えれば、景観の《文法》は、(言葉の言語学的意味で)ひとつの形態学をとくに発展させたが、それは実際にはひとつのシンタックスではなかった。景観の地理学において発展された形態学は当然、三角形Iによって際立たせられる(図2)。しかしながら論じられてきたように、多くの形態学が可能であり、また景観の形態学はそのなかのひとつである。現実には三角形IIから別の形態学が部分的に創造されている。それゆえに景観の地理学の言語はひとつの社会的知覚から生じるが、それは人間科学全体の言語にとって同じ事情である¹⁵⁾。コードの変更は、コードが提示される社会環境のなかで十分な合意がある場合にのみ可能である。そうした事例は地理学に比較的多くあるが、そこに留まる必要はない。

したがってメッセージは十全に定義され理解されたあるコードによって伝達される。このことを納得するために、二つの地理文法の構造を比較すれば十分である。1941年にル・ラヌーの学位論文が発行され、1969年にデスブランクのそれが発行された¹⁶⁾。両者は正確に同一の構造を有しており、同形的(isomorphes)である。二人は同一のコードを使用し、また同一の知覚に依拠している。同一の仕方でも物について語り、そして沈黙する。批判することではなく、言語が同一であることを示すための単なる観察が必要であることがわかるだろう。したがって異なった地理的構造に同一の言語をそして結果として同一の類に属している地理的文法が適用された。

景観の地理学が形態と機能を外示するかぎり、その地理学は多くの貢献を行なってきており、今なお多くのことを提供しうることは、それでも事実である。だが上述したように、社会的知覚が《生きられること》へ向けて移動しているかぎり、景観の地理学が生じる三角形はもはや優越性をもたず、《見られること》

は地理学的認識を論じ尽くすのに十分ではない。こうした主張と景観の地理学へ向けられた暗黙のうちの(ひとつのではない)批判に驚かれるかもしれない。なぜならル・ラヌーとデスブランクは情熱的にまた繊細さをもって《生きられること》の輪郭を明らかにしたと反論できるからである。二人がそれを行なっているとしたら、ある幻想の犠牲になっているのだろう。彼らは機能的な諸関係について記述し説明したが、実存的な諸関係についてはほとんどあるいはなにも触れていない。例えば、ル・ラヌーがある契約を記述する場合、機能についてであって《生きられたこと》については記述していない。《協同は不平等になる可能性をもつ家畜の二人の所有者—富者と貧者—の間で結ばれる。その契約は、soccida(société)という名で呼ばれる。より豊かな協同者—le cumonarzu mannu—は事業に3分の2の家畜を注ぎ込み、もう一方の協同者—le cumunarzu minore—が残りの家畜を提供する。経営の費用は牧草地の賃貸料を含めて折半されるが、群の監視は羊飼いの仕事となる。収益は平等に分配される》¹⁷⁾。しかしながらこの機能的な枠組に、どのような異なった非対称的な実存的関係があるのか。富者はその利益のために、契約にどの程度のゆがみを受けさせるのか。そうしたことについてはなにも明らかではない。同じように、貧困や疾病についてのとりとめのないいくつかの描写、あるいはデスブランクの場合に《生きられること》はひとつの文章の中にあられるが、それは敷衍されない。《我々農民は労働、作物、耕地に縛られているが、幻想を抱いていない。20代の息子は工場に雇われている》。誰もそれを決してみない。《我々のあとには砂漠になるだろう》¹⁸⁾。この指摘のなかに機能的関係の反対、つまり実存的関係についての省察の端緒がある。つまり、機能は別のコードによって共示されねばならない。全ての景観は領域性を隠蔽し消してしまう。なぜなら領域性を読むためのコードつまり言語がないので、領域性は理解不可能になっているからである。これから作らねばならない領域性の地理学だけが、景観の地理学の諸形態と諸機能が隠してしまうものを理解可能にする。つまり《我々は次の理由から機能主義的視点に異議を唱える。その視点にとって中心点がなければならぬ場所に、それが示している空白のゆえに。仮定されている諸制度は社会の《真の欲求》に役立つためにのみそこにあるといわれるが、その《真の欲求》とは、どのようなもので

あるのか?》¹⁹⁾。景観の地理学がその形態—機能的視点において反論されることが同様に言えるであろう。なぜならその地理学はある社会の《現実的な諸関係(relations réelles)》をかえりみようとしないからである。

しかし領域性とは何か。

《生きられること》あるいは領域性の地理学

ここで問題なのは、私たちに提供される狭い枠内で、領域性について記述されてきた全てを検討することではなくて、その本質を明らかにすることである。領域性の概念は、動物行動学の研究における基本概念のひとつである。この概念は、すでに3世紀前に博物学者によって暗示されていたが、実際は20世紀初頭になってはじめて明示化された。この領域性は厳密にはワードによって1920年に、《ある領域を所有し、その固有種のメンバーに対してその領域を防御するために、ある有機体によってとられる特徴的なふるまいとして》²⁰⁾、定義された。多くの論者が、領域性というこの概念を展開し例示してきたが、そのなかで最も著名な人物だけを示すと、ヘディガー、カールホーン、カール・フォン・フリシュやコンラート・ローレンツなどが挙げられる。動物界でなされた多くの発見が、人間行動に適用されたり移し替えられた。こうした適用や移し替えの妥当性に対して異議を唱えることができるが、そのようなことは我々の関心ではない。人間におけるいくつかの距離に関するホルの仮説と主張が、彼が研究した様々な文化を横断して、十分に受け入れられると認めよう²¹⁾。その仮説は、非常に巧みな仕方では他者との関係による位置の文化的な意味作用、つまり関係的距離のそれについて我々に教えてくれる。したがってプロクセミックスの本質である《シチュアシオニスト(situationniste)》的領域性が問題となる。プロクセミックスは大変有効であるが、領域性の地理学を基礎付けるには不十分である。考慮されねばならない本質的要素は他者性(l'altérité)との関係である。この他者性は、もはや単なる他者(l'Autre)、同包ではなく、自分自身に外在している全てのものである。このことから、領域性の概念がかなり拡大されざるをえないことは明白である。領域性は、ある集合体、それゆえにある個人が外部性と維持している諸関係のシステ

ムとして定義される。我々が外部性について語るのは、《場(topie)》や場所(lieu)と同時に別の集合体や別の存在、あるいはまた制度的システムなどのような抽象的空間も関係することを明らかにするためである。我々がここにとどまるとしたら、領域性の地理学と古典的な人文地理学の間にアプローチの差異は存在しないだろう。実際には交換あるいはコミュニケーションの過程として定義される関係のなかに、全てのことがある。生物学的かつ社会的に生きるために、我々は諸関係の複雑なネットワークに取り囲まれている。同様に我々の全ての諸関係が生物—社会の界面(interface)に刻印されているといえる。この諸関係は、我々の構造の作用の状態を維持するために不可欠である。この諸関係によって、我々が良くも悪くもエネルギーと情報に関する自らの欲求を満たすためである。

全ての関係は、それがいかなるものであれ、空間と時間に刻印されており、過程において構成的な諸因子として様々に媒介する土台と持続を必要とする。諸関係は二価的あるいは多価的であって、諸関係を分析するためにあたかもそれが二価的であるかのように扱おうとしても、多くの場合にその関係は多価的である。我々は絶えず、多価的な生物—社会的諸関係の過程に巻き込まれており、この諸関係は非常に複雑性をもったグラフによってのみ表現されるだろう。他方で、諸関係は自然に展開されるわけではなく、コード化され調整されている。生物学的関係あるいは社会的関係が問題である際に、自動的な調整の機構や諸コードの体系が常に存在しており、ここでその語源的な意味でその言葉を理解すると、その機構や体系が生物学的あるいは社会的関係に対してその固有性(cohérence)を確実にしている。

この諸関係は対称的にもなるし非対称的にもなる。関係的な過程の最後(単純な二価の場合)で、二人の当事者が、費用をお互いに承認しあいながら、その固有の構造を維持するためにひとつあるいはいくつかの欲求を満たすことを可能にするエネルギーそして/あるいは情報においてある利益を獲得する場合、関係は対称的である。当事者の一方が利益以上の費用負担に同意しなければならず、それによってその固有の構造を危機に陥らせる場合に、関係は非対称的である。対称的な諸関係は、非対称的な関係に比べてはるかに稀であ

ると直ちに言えよう。我々の歴史と日常生活のすべては、非対称的な関係から織りなされている。このようにこの分析枠組は、生物学的であろうと社会的であろうといかなる関係にも適用される。そのことを例示してみよう。このための事例を、景観の地理学の寄与が別のコードによって共示されうることを示しているル・ラヌーとデスブランクから借用しよう。長い間、サルディニア島での人間-大地関係は、多くの理由から非対称的であったのに加えて、まだ生物学的にマラリアの存在とともにあった。

1887年と1930年の間にマラリアによる死亡者(パーミル)²²

1887-89	1889-1901	1912-14	1920-22	1923-25	1928-30
298.2	252.0	74.9	108.0	88.6	59.4

人間をその健康と意志のなかで次第に解体し、最終的には死へと導く非対称的な関係。またウンブリアでの伝統的な分益小作制の時代の耕作者と地主間の非対称的な関係。《地主が全てを決定する。すなわち耕作、作物の選択と輪作、肥料、労働日。小作人の義務を全て描くことは不毛であり、契約は通常 80 項目以上からなっている》²³。ルネ・ロッシュフォールは特別な言葉を用いていないが、たいへん素晴らしい仕方でもシチリアに関して非対称的な関係の全体を明らかにしている。家族内関係、共同体内関係、諸制度との関係など²⁴。最後に我々が定義したような領域性に関する本物の記録である最近の文学作品を引用できるだろう。それはガヴィーノ・レッダの本である²⁵。その作品は、1938年にサルジーニアの貧しい一家に生まれたガヴィーノの生涯を全く自伝的に跡付けたものである。大人になることでその関係の体系を修正しようとするひとりの子供の諸関係が、構成され、解体されあるいは強化されるのがわかる。その証言は多くの点で衝撃的である。この本が明らかにしている学校関係の破棄は、父が群を監視するために息子を必要としていることに由来するが、父の権力という考えを悲劇的に示しており、またこの父自身が別の諸権力に苦しめられている。

しかしながら関係の言語に到達するために、こうした断片的な描写はいかにして克服されるだろうか？。まず最初に《生きられること》に到達したいとすれば、人間存在の全てのカテゴリーを包括するひとつの実体として人間を考えることを止める必要がある。諸関係

は男性と女性、子供、大人、老人にとって差別的である。ひとつの領域性ではなく多数の領域性が存在する。なぜなら関係のひとつのシステムではなく多数のシステムが存在するからである。ブンゲとボルデサの言葉を拡張することができるだろう。《子供たちは感情からではなく科学から選別されている》²⁶。女性や老人にとっても事情は同じである。なぜだろうか？。なぜなら一般的には、しばしば最大の権力を保持し、社会-経済的な面で多くの非対称的な関係に責任をもつのが、25~45歳の成人男子であるから。したがってその実存の異なった水準で人間存在を考えるべきである。つまり子供の領域性と同様に大人あるいは老人の領域性が存在し、女性の領域性と男性の領域性も存在する。一言でいうと領域性は、差異化(differentielle)されている。しかしながら、さらに空間的な階層と時間的な尺度、人間諸集団の規模 エネルギーそして/あるいは情報は情報にかかわる関係の内容の階層も考察しなければならない。差別的な視座がなければ、《生きられること》は本当には理解されない。

以上のことは、諸関係の人間的一論理(une anthropo-logique)、すなわち関与的(pertinentes)な諸関係を意味している。諸関係の間のいくつかを思い起こそう。利用可能なエネルギーが含まれるかぎり土地との関係があるが、単純化するために農業関係あるいは農業システムとの関係について触れよう。費用に対する利益の交換、つまり一方に収奪がありと他方に投下があるので、上で定義された意味でひとつの関係が問題である。生態学的な均衡は、この収奪-投下のつながりに立脚していることがわかる。対称的な関係が、このつながりを重視する関係であるの対して、非対称的な関係はそれを重視しない関係である。前者の場合に關係の長期にわたる保存があるのに対して、後者の場合に非対称的な関係を実践する人々にとって、時間のなかで自律性の喪失を結果として伴うことになる関係の漸進的破壊がある。確かに初歩的な事例ではあるが、関心の中心を關係の諸過程よりも諸結果に置く機能的分析との差異が、直ちに気づかれるだろう。前例から引き出される栄養上の関係もまたたいへん教訓に富んでいる。その関係は多くの点で生物学的、社会的存在を条件づけている。栄養過少、栄養失調、栄養過多はひとつの非対称的な関係のいくつかの表出である。逆的にそこでも、対称的な関係は最終的には稀である。

厳密に社会的分野において、医療関係もまた非常に重要である。つまりそれは《制度化されたものに対する制度》²⁷⁾である。環境と工業との関係は、第三次産業との関係と同じように、最終的にはあまりよく知られていない関与的關係である。単に物理的環境のみならず社会的環境もまた問題になる。

われわれの実存が多角的諸関係から織りなされておき、この諸関係は創造され、消滅し、別のそれにとって代られる。いくつかの関係は実存を通じて存続するのに対して、別の諸関係は一時的であり、実存の一契機だけを特徴づけるが、しかしながら全ての関係が我々の領域性を実現するのに寄与するのであり、よって領域性は静態的ではなく動態的である。こうした状況において、景観は領域性を隠蔽する。同一の景観がいくつもの領域性を隠蔽する。なぜなら関係的な諸過程は、諸関係の結果だけを示す景観の地理学において把握されないからである。

結局、景観が表層の構造であるのに対して、領域性は深層の構造であるといえるだろう。

ここで提示された視点は人間生態学のそれに非常に近く、人間生態学は次のような企図を持っている。《一方で社会—空間—時間という3次元のシステムにおいて生じる諸関係の研究であり、他方でシステムの諸資源と両立可能な最大の自律性を獲得するという視座でこの諸関係の最適化、管理、調整を研究することである》²⁸⁾。つまり領域性の地理学は、諸関係を通じて《生きられること》の理解を促す。異なっただいくつかの領域性を特徴づけようと望むことは時期尚早である。しかし非対称性という有効な係数で、領域性の仮説を作ることができ、それは支配された社会の領域性だけであろう。領域性の地理学が非対称的な多くの諸関係を唯一説明しうる権力の観念に大きな位置を開けねばならないことは明らかである。

結局、この領域性の地理学は至る所に現れあるいは爆発した異議申立て運動や暴動を理解するために必要となるが、こうした運動や暴動の原因はしばしば、それとして知覚され、もはや耐えられなくなった非対称的な諸関係の存在にある。

注

- 1 CASSIRER, Ernst (1975): *Éssai sur l'homme*. Paris. Editions de Minuit, p.72. カッシーラ(宮城音弥訳)『人間』岩波書店。
- 2 Greimas, A. -J. (1970) *Du sens, essais semiologiques*. Paris, Seuil, p.22. グレマス(赤羽研三訳)『意味について』水声社,1992。
- 3 Ibid,p.22.
- 4 この問題については以下を見よ。THOM, René (1974) *Modèles mathématique de la morphogenèse*, Paris, Union générale d'Éditions, Coll. 10-18, p.231.
- 5 ECO Umberto (1975) *Trattato di semiotica generale*. Milano, Bompiani, p.83.
- 6 FOUCAULT, Michel (1966) *Les mots et les choses*. Paris, Gallimard. フーコ(渡辺一民・佐々木明訳)『言葉と物』新潮社,1974。
- 7 CHARDIN, Jean (1965) *Voyages en Perse*. Paris, Union Générale d'Éditions.
- 8 ROUGERIE, Gabriel (1969) *Géographie des paysages*. Paris, PUF, P.5.
- 9 Ibid,p.5.
- 10 Ibid,p.6.
- 11 FREMONT, Armand (1976) *La région espace vécu*. Paris PUF, p.37.
- 12 DECERTEAU, Michel (1974) *La culture au pluriel*. Paris, Union Général d'Éditions, p.37. ド・セルトー(山田登世子訳)『文化の政治学』岩波書店,1990。ポチヨムキンの村々の逸話は知られている。この村々はドニエブル川岸で、エカテュリーナ二世を歓声をもって迎い入れる着飾ったムジク(農民)に取り囲まれた晴れ晴れとした小屋を任せられた。暗闇の場所と死体は他の場所に移された。
- 13 ギョームから借用した表現。GUILLAUME, Marc (1975) *La Capital et son double*. Paris, PUF.ギョーム(斎藤日出雄訳)『資本とその分身』法政大学出版局。
- 14 LOTMAN Ju.-M. et USPENSKIJ, B. A. (1975) *Tiopologie della cultura*. Milano, Bompiani.
- 15 おそらく他の諸科学はもはやそれを逃れられない。この主題に関しては、SAPIR, Edward (1968) *Inguistique*. Paris, Éditions de Minuit, pp.73-90.
- 16 LE LANNOU, Maurice (1941) *Pâtres et paysans de la Sardaigne*. Tours. DESPLANQUES, Henri, (1969) *Campagnes ombriennes, Contribution à l'étude des paysages ruraux en Italie central*. Paris, A. Colin.
- 17 LE LANNOU, op cit. , p.174.
- 18 DESPLANQUES, op cit., p.273.
- 19 CASTORIADIS, Cornelius (1975) *L'Instituion imaginaire de la Société*. Paris, Seuil, p.161. カストリアディス(江口幹訳)『想念が社会を創る』法政大学出版局,1994。

- 20 HALL, Edward T. (1971) *La dimension cachée*. Paris, Seuil, pp.22. ホール(日高敏高・佐藤信行訳)『かくれた次元』みすず書房,1970。
- 21 Ibid.
- 22 LE LANNOU, op. cit., P.81.
- 23 DESPLANQUES, op. cit., p.189.
- 24 ROSHEFOR, Renee (1961) *Le travial en Sicile*. Paris, PUF.
- 25 LEDDA, Gavino (1975) *Padre Padorne: l'educazione di un Pastore*. Milano, Feltrinelli. レッタ(竹山博英訳)『父 パードレ・パドローネ』朝日新聞社, 1995。
- 26 BUNGE, W.-W. and BORDESSA, R. (1975) *The Canadian Alternative: Survival, Expeditions and Urban Change*. Toronto, Geographical Monographs No.2, p.1.
- 27 DUPUY, J.-P. et ROBERT, J. (1976) *La trahison de l'opulence*. Paris, PUF, p.29 et ss.
- 28 RAFFESTIN, Claude (1975) Remarques sur le concept d'écologie humaine. *International Meeting on Human Ecology*. Vienna, Georgi Publishing Company, pp.403-410.